A CASE OF PRIMARY CANCER OF THE FRONTAL SINUS

By
T. KOBAYASHI

From the Department of Oto-Rhino-Laryngology, Nagasaki University, School of Medicine
(Director: Prof. T. Goto)

This is a case report of a 53 year old male with primary carcinoma of the frontal sinus in a 53 years old male.

The tumor was localized in the frontal sinus. The preoperative diagnosis was possible mucocele.

A radical extranasal operation was carried out successfully. The patient has shown no signs of recurrence for one year.

原発性前頭洞癌の1例

長崎大学医学部耳鼻咽喉科学教室 (主任: 後藤敏郎教授)

小林 明
コバヤシ トウメイ

緒 言

鼻副鼻腔は悪性腫瘍の好発部位であるが、その発生は殆んど上顎洞に限られ他の副鼻腔に見られることは極めて稀である。著者は最近前頭洞 mucocele の診断のもとに手術を行い、その結果原発性前頭洞癌であることを確認したので稀有な例として報告する。

症例 西○義○ 53才、男子、初診 昭和33年1月11日。主訴 左上眼瞼の腫脹、家族歴では父の異母兄弟中1名が胃癌で死亡した他は特記すべきものはない。既往歴には著患を知らない (第1図)。

第1図 術 前

昭和30年の秋に左下眼瞼に大豆大の腫脹のあるのに気付いた。当時眼科医を訪れたが診断未定のまま経過していたが32年5月に腫脹が幾分か増大したように思われたので眼科医の切開を受けた。この切開創は順調に治癒した。32年9月に再び同一部位の腫脹をきたしたので再切開を受けたがその後下眼瞼には異常は見られない。32年11月中旬に左上眼瞼に腫脹が起つたが放置したまま翌33年1月11日当科を訪れた。

全身所見は体格中等で栄養は良好、血液像その他に著変を認めない。局所々見は左上眼瞼内側から鼻根部にわたつて軽度の腫脹があり、色調は正常で圧痛はなく、弾性や硬である。耳腔は両側共に全く異常がなく、レ線写真では上顎洞、篩骨洞には良好な発育が見られるが病的陰影は認められない。眼球運動は正常で眼球突出は右21mm、左24mm (nach Hertel) である。視力は右0.1 (0.3×-8.0D)、左0.1 (0.3×-5.0D)。視野は両側共に軽度の求心性視野狭窄が認められる。眼底は軽度の豹紋状を示しや著明な下方コーヌスを認める他には特に変化は認められない。以上の所見から前頭洞 mucocele の診断のもとに手術を行った。

手術所見 型の如く上顎洞、篩骨洞を開いてみると、上顎洞は容積大で洞粘膜は篩骨洞との境界部分で一部浮腫性の腫脹が見られる他は全く正常で、天蓋に近い部分の粘膜は皺壁を形成して中隔状に突出している。骨壁は

正常である。篩骨洞は骨側に小蜂窠があり粘膜は軽度には腫脹している。又その側方眼窩との間にくるみ大の大蜂窠がありその粘膜は正常で鼻腔との交通が認められる。以上の蜂窠の後方に大きい洞が2個あり、その後方のものは楔状洞と思われるが粘膜はこの洞のみやゝ腫脹している。但し内容は空であつた。篩骨洞の前群は大小数個あり、何れも粘膜には腫脹が認められ、一部に粘稠な粘液を入れているものもある。更に前上方を鉗除するとやや硬い肉芽状のものを得たがこれは前頭洞に相当する部分と思われた。一方眉毛切開法によつて前頭洞を開いた。その前下壁は骨の吸収が認められ、中に大きな洞が

第 3 図

あつて浮腫状の肉芽様の組織で満たされている。分泌液の滯留は認められない。眼窩壁にも一部に骨の吸収が認められた。よつて充分に肉芽様組織と一部残存の洞粘膜を除去したのち前頭洞には細いガーゼタンポン1本を挿入して2針縫合を行い、上顎洞には広い対孔を作りガー

第 4 図

ゼタンポンを施して術を終つた。

肉芽の組織検査の結果扁平上皮癌を確認した(第4,5図)。

第 5 図

術後の全身状態は良好で術創の治癒も順調に経過して術後14日目に限院せしめた。一方術後3日目よりレ線治療を開始した。4門照射で1日1門50rを順次に4門まで4日間連続して照射し、その後3日間を休み、かくして1週200r宛第7週まで照射した。更に4週間の休みの後第2回目のレ線治療を行い総量2800rを照射した。その後は何等の処置も施すことなく経過を観察中であるが、術後約1カ年を経過した今日、全身局所共になん等の異常も認めず健康体として家業に励んでいる(第2図)。

第 2 図 術後1年

考 按

原発性前頭洞癌は非常に稀な疾患で、本邦での報告例は菅井他(1956)の報告および佐藤他(1958)の報告と統計によると、伊積の報告(1924)以来19例とされてい

る。しかも前頭洞癌の予後が極めて悪い事は一般の認める所であつて、本症の報告例の大多数が早期に死の転帰を取つており、文献に予後の記載のないものでもその症例からみて早期の死が考えられる事は佐藤他も指摘している通りである。この事實は要するに他の領域における癌の場合と同様に早期発見が困難である事によるもので、このために佐藤他も手術可能時期には診断が不可能であり、診断が確定する頃には手術が不可能であるから前頭洞癌に関する限り、手術はさけてレ線治療を原則とすべきであると述べているが、本症例からかえりみて頭蓋底への侵襲が見られない時期の前頭洞癌では、その予後にはかなりに良い結果が期待できるように思われる。

結 語

原発性前頭洞癌に手術を行い、良好な経過を辿りつつある1例を報告した。

文 献

- 1) 伊積政雄：前頭葉を侵せる前額竇内基底細胞の1例，日耳鼻，30；1，85，1924。
- 2) 松田龍一：前額竇に原発したる扁平上皮細胞癌腫の1例，日耳鼻，31；6，746，1926。
- 3) 佐竹享：前額竇癌症例，耳喉科，8；5，430，1935。
- 4) 里村隆：巨大なる前額竇癌腫症例，耳喉科，11；6，521，1938。
- 5) 斎藤一郎：前頭洞癌の1例，耳鼻臨，46；2，96，1953。
- 6) 皆藤彦義：原発性前頭洞癌の1症例，耳喉科，27；4，211，1955。
- 7) 後藤敏郎：眉毛切開による前頭洞及び篩骨洞の鼻外手術について，耳鼻臨，28；4，259，1956。
- 8) 菅井保三他：皮様嚢腫を思ひしめたる原発性前頭洞癌の1例とその文献的考察，耳喉科，28；11，735，1956。
- 9) 佐藤武男他：前頭癌の2例とその文献的考察，耳鼻臨，51；3，207，1958。
- 10) 乗金節治他：Pyocle と誤診せる原発性前頭洞癌の2症例，耳鼻臨，52；3，31，1959。
- 11) *Sciarra, P. & Hallberg, E.*: Primary Squamous Cell Carcinoma of the Frontal Sinus. *Ann. o. Oto.* 65；225，1956。
- 12) *Breeding, E.*: Malignancy of the Nasal Accessory Sinuses with the Frontal Sinuses. *Ann. o. Oto.* 49；141，1940。
- 13) *Rainer, H. & Burne, C.*: Front-Ethmoidal Carcinoma. *J. Laryngo. a. Oto.* 70；420，1956。
- 14) *Brunner, H.*: Primary Tumors of the Frontal Bone. *A.M.A. Arch. o. Oto.* 57；158，1953。
- 15) *R. Koschier*: Stirnhoehlensarkom. *Msschr. Ohrenheilkunde* 85；69，1951。

(原稿到着=昭和34.4.3日)